男子ハンドボール競技におけるウィングシューターへのアシストパスプレー

-世界と国内のトップレベルを比較して-

森永 浩壽（201512048、ハンドボールコーチング論）

指導教員：會田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード：ウィングシュート、アシストパス

【目的】

本研究では，記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて，ウィングシュートを導くアシストパスプレーを,世界最高峰のヨーロッパチャンピオンズリーグと国内最高峰の日本リーグとの間で比較・検討し，ウィングシュートの生み出し方の違いについて明らかにし，有効なウィングシュートを生み出すアシストパスプレー方法について実践現場に有用な知見を提言する.

【方法】

世界レベルの試合としてEHF（ヨーロッパハンドボール連盟）チャンピオンズリーグ20試合，国内レベルの試合として日本リーグ 16 試合のアシストパス局面，計394シーンを研究対象とした.

分析項目は，①ウィングポジション，②プレー結果，③均衡打破局面からウィングシュートまでのパス回数，④アシストパスの導き方，⑤アシストパスのタイミング，⑥アシストパスの種類，⑦アシストパスの方法，⑧ウィングシューターのポジショニングのそれぞれの生起数および生起率であった．なお，本研究ではプレー結果に関しては，ゴールインと7m スロー獲得を有効なプレー，ノーゴールとターンオーバーを有効でないプレーと再分類した.

世界レベルと国内レベルの差を明らかにするために，カイ２乗検定と残差分析を行った．統計処理の有意性は5%で判定した．統計ソフトは，SPSS を用いた.

【結果】

本研究の結果，以下の5点が明らかになった.

⑴ １試合あたりのアシストパスプレー数は，左右ウィングを合わせると，世界レベルが9.8本，国内レベルが12.4本であり，国内レベルの方が2.6本多かった.

⑵ ウィングで攻撃を終える場合，有効なプレー結果を導き出している割合は，世界レベルが 69.2%，国内レベルが59.3%であり，世界レベルの方が9.9%高かった（表1）.

⑶ アシストパスの導き方は，世界レベルはコントラずらしが有意に多く，国内レベルは真上飛ばしが有意に多かった.

⑷ アシストパスのタイミングは，世界レベルはキャッチしてすぐのパスタイミングが有意に多く，国内レベルはフェイントしてからのタイミングが有意に多かった.

⑸ アシストパスの方法は，世界レベルはバックパスとサイドハンドパスが有意に多く，国内レベルはラテラルパスが有意に多かった.

【考察】

ウィングで攻撃を終える場合，有効なプレー結果を導き出している割合が，国内レベルは世界レベルより9.9%低いことから，国内レベルではウィングへのアシストパスプレーにおいて確率の低い最終プレーを多く選択していると考えられる．アシストパスプレーについては，国内レベルは世界レベルよりコントラずらしのようなパスの方向転換を多用していないこと，早いタイミングでパスをしていないこと，ボールを体の中心から外した状態でパスをしていないことがわかった.

表1 世界レベルおよび国内レベルにおける有効なプレー結果と有効でないプレー結果の比較

	世界レベル n=195	国内レベル n=199
有効なプレー	69.2%*	59.3%†
有効でないプレー	30.8%†	40.7%*

カイ２乗値=4.2, $p<0.05$

＊：有意に多い †：有意に少ない

【実践現場への提言】

男子ハンドボール競技において，国内プレーヤーがウィングシューターへのアシストパスプレーを有効に行うためには，①目の前のディフェンスの動きだけでなく，ディフェンス全体を俯瞰的に見て切り返しのパスなどを使うこと，②ボールをもらう前に，前方のディフェンスを観察し素早いパスをする習慣をつけること，③キャッチしたらすぐに体の中央からボールを遠ざけ，ディフェンスのアタックを受けてもパスできるようにすることの3点を習得すべきであると実践現場に提言できる.